

## 事業報告書（令和7年度）

事業名

学びの多様性×教育者育成 実践モデル構築事業

～校内フリースクールを活用した現場接続型人材育成プログラム～（通称：カラエボ）

団体           iLCA          （           Inclusive                     Learning                     Choice                     for                     All           ）

担当者名           横西文代          

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

### 1. 活動内容（日時、場所、講師、参加対象者、人数、内容等）

#### （1）事業趣旨

本事業は、増加する不登校・学習困難等を抱える児童への支援ニーズと、学校現場における人材不足、そして若手教育者の実践機会不足という地域課題を背景に実施した。

岡山市立津島小学校校内フリースクール「カラフル教室」を拠点とし、

- 子どもを支える実践
- 支援者を育てる実践
- 専門家伴走による質の担保

を同時に進める「専門家伴走型・実践型人材育成モデル」の構築を目的とした。

通称：カラエボとして、活動をした。

- カラ：カラフル＝学びの多様性・個性の尊重
- エ：エデュケーション（教育）＝学びの場／教育者育成
- ボ：ボランティア＝現場での関わり／実践による学び



本事業では、校内フリースクールに通う児童（教室に入りづらい、学習や対人関係に困り感を抱える児童等）に対し、学生・社会人が支援に入り、専門家の助言と振り返りを通して「見立て（アセスメント）に基づく関わり」を学ぶことを重視した。

#### （2）参加者募集（2025年7月～8月）

令和7年7月より参加者募集を開始し、2025年7月から8月末にかけて事業チラシを作成・配布した。岡山大学東條先生、就実大学岡田先生、IPU環太平洋大学 内田直美先生への周知依頼、および大学生ボランティアサークル等を通じて広報を行った。

その結果、以下の参加者が集まり、初年度はこの4名で活動を開始した。

- 岡山大学：1名
  - 岡山理科大学：2名
  - 社会人（放課後等デイサービス職員）：1名
- 合計：4名

※ボランティア登録および学校現場での受け入れ調整は岡山市立津島小学校が担当した。

### （3）事前オリエンテーション（活動開始前の共通理解づくり）

【日時】 2025年8月24日（日）13:30～

【場所】 京山公民館

【参加者】 大学生3名、社会人1名（欠席）

【内容】



- プロジェクト趣旨説明／「カラエポ」の名称の意味共有
- 自己紹介・参加動機の共有（参加者間の関係づくり）
- 学校現場に入る前の心構え、子どもと関わる際の基本姿勢（安全配慮・距離感）
- 困り感のある児童に対する見立ての基本と、声かけ・関わり方の留意点

【講師】 内田直美先生（IPU 環太平洋大学）

### （4）学校現場での実践（2025年9月～12月）

2025年9月より、岡山市立津島小学校 校内フリースクール「カラフル教室」にて活動を開始した。※学校内での活動の様子は、個人情報保護の観点から撮影していない。

#### ◆参加状況（活動日）

【9月】

- 9月2日：岡山理科大学学生2名
- 9月17日：社会人1名（終日）
- 9月25日：社会人1名（終日）

### 【10月】

- 10月6日：岡山大学学生1名
- 10月9日：社会人1名（終日）
- 10月15日：岡山理科大学学生1名
- 10月20日：岡山大学学生1名
- 10月22日：社会人1名（終日）

### 【11月】

- 11月10日：岡山大学学生1名
- 11月17日：岡山大学学生1名
- 11月19日：社会人1名（終日）
- 11月24日：岡山大学学生1名

### 【12月】

- 12月8日：岡山大学学生1名
- 12月15日：岡山大学学生1名

#### ◆学校現場での主な活動内容（何をしたか）

活動は、児童の状況に応じて「観察→関係づくり→学習支援」の順で組み立ていく予定であったが、訪問回数に限りがあったため、本年度は主に「関係構築」に重点を置いた活動となった。

- 授業中の行動パターン観察（集中の持続、離席、指示理解の様子等）
- 困り感の背景要因の整理（環境要因・課題の見立て）
- 子どもとの対話・安心できる声かけ
- 他児との関係性の把握（会話、距離感、トラブルの兆候等）
- 教室移動や不安場面での見守り
- 休み時間での関係形成
- 学習場面での伴走的支援（可能な範囲）

#### （5）オンライン伴走支援（9～10月）

9月および10月は、活動後にLINEグループを活用し、内田先生と参加者（学生・社会人）が情報共有を実施した。

- 子どもの様子の共有
- 困った場面の相談
- 対応の振り返り
- 次回への改善点の整理

専門家による継続的助言体制を整えたことで、「現場での気づき」を次の関わりに反映しやすくなった。参加者からは「学校の先生方の大変さがよく分かった」という声もあった。

#### (6) 専門家による現場伴走支援 (11月)

10月に内田先生の学校訪問を予定していたが、ボランティアとの日程が合わず実施できなかったため、11月10日および11月19日に内田先生が津島小学校を訪問し、ボランティア学生・社会人とともに現場に入り、OJT型の実地指導を行った。

##### 【主な内容】

- 現場での具体的支援助言（優先順位の整理）
- 子どもへの声かけの実演
- 関係構築の方法提示
- 活動後の困り感・対応の共有と助言

これにより、「理論→現場実践→振り返り→改善」の循環をつくり、理論と実践が分断されない育成モデルを目指した。

#### (7) 中間振り返り検討会 (2026年1月)

【日時】 2026年1月11日(日) 13:00~15:00

【場所】 京山公民館

【参加者】 学生3名

(社会人1名は1月29日に別途実施)

##### 【内容】

- これまでの活動状況共有
- 体験の振り返り（難しかった点/困った点）
- 「こうだったら良かった」という改善点の整理
- 良かった点・手応えの共有
- 次年度に向けた体制検討



加えて、学習支援に役立つ教材づくりや、現場で使える具体教材（ICT教材やアナログ教材）の紹介も行い、活動の質の向上を図った。参加者からは「大学では理論中心で、具体的な支援方法や教材を知る機会が少ないため、非常にありがたい」との声が寄せられた。



#### (8) 課題を踏まえた構造的改善（学校外での関係づくりモデル）

1月の振り返り会で、学生から

- 平日午前は大学授業があり参加が難しい
- 学校側は午前のみ受け入れ可能  
という制度的ギャップが指摘された。

また現場感として、

- 繊細な児童は初対面の大人に不安を抱きやすい  
という課題も共有された。

これを受け、「学校外で先に関係をつくり、信頼構築後に学校で再会する」新モデルを検討・開始した。

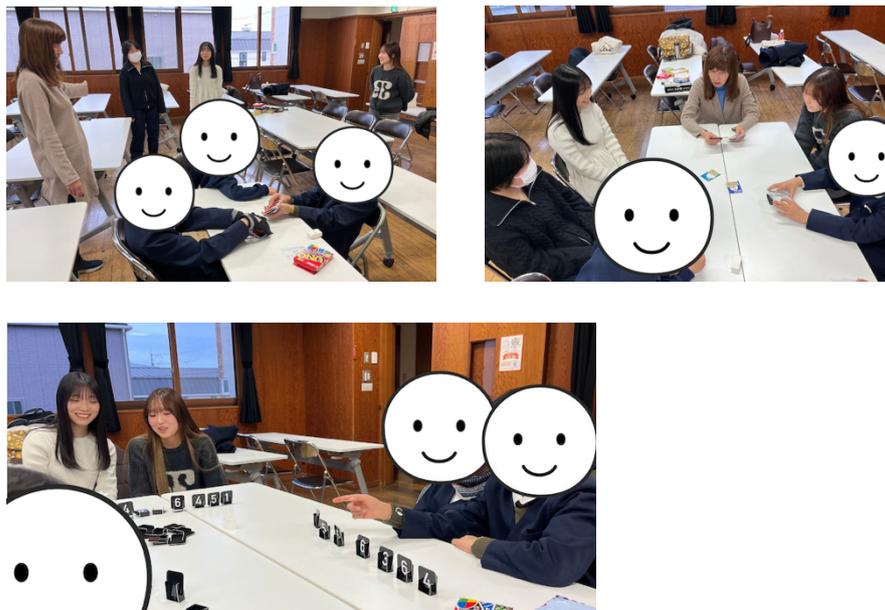
**【日時】** 2026年2月10日（火）16:00～17:00

**【場所】** 京山公民館

**【参加対象】** 大学生、内田直美先生、子ども

**【参加人数】** 8名

内田先生のOJT型指導のもと、信頼関係構築の実践的手法を現場で学んだ。事前交流を実施し、ボードゲーム等を通じて支援以前に関係形成を優先する関わりを体験した。実際の子どもの関わりを通じて、学生は人間関係の築き方、状況に応じた声かけ、距離感の取り方などを具体的に学び、教員養成課程では得がたい実践的知見を獲得する機会となった。



(9) 山田充先生による専門研修 (2026 年 2 月)

【日時】 2026 年 2 月 12 日 (木) 19:00~21:00

【場所】 IPU 環太平洋大学 グローバルキャンパス

【参加対象】 カラエボ参加者、次年度参加希望者、支援者、教員

【参加人数】 18 名 (参加者 14 名+山田充先生、内田直美先生、団体関係者 2 名)

当初は事業開始早期の実施を希望していたが、山田先生のご予定が半年先まで埋まっていたため 2 月実施となった。次年度の参加者拡大も見据え、岡山大学・IPU・岡山理科大学へ周知し、学生 5 名が新たに参加した。社会人枠として放課後等デイサービス勤務者 2 名も参加した。

■事前準備 (研修と現場をつなぐ工夫)

研修に先立ち、山田先生に津島小学校を訪問いただき、岡山市立津島小学校の校内フリースクール「カラフル教室」在籍児童の様子を観察・アセスメントしていただいた。

(行動特性、学習時の困り感、環境要因、対人関係等)

観察結果は研修内で具体事例として紹介され、実際の子どもに基づく支援視点を共有した。

■研修内容

- 「困った子」ではなく「困っている子」と捉える視点
- 「努力不足」「性格」で片付けないアセスメントの重要性と方法
- 困り感の背景要因を整理する枠組み
- 支援事例の紹介

- 学習支援における具体的な声かけ・環境調整の方法

単なる理論講義ではなく、実際に支援に関わっている児童事例を用いた実践的研修となった。



#### ■研修後の展開

【日時】 2026年3月2日(月) 15:00~17:00

【場所】 京山公民館

【参加対象】 大学生、内田直美先生、子ども

【参加人数】 6名

研修後の3月2日、内田先生および学生が再度集まり、山田先生によるアセスメント内容を改めて確認するとともに、児童ごとの支援の優先順位を整理し、具体的な関わり方の再設計を行った。あわせて、関係構築を最優先とする段階的支援の方針や、声かけの具体化、学習支援を導入する適切なタイミングについて検討し、より実践的な支援計画を策定した。

その後、内田先生の指導のもと、実際に子どもと関わる時間を設け、検討した支援方針を現場で実践する機会とした。



## 2. ESDの視点

### ①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

本事業を通して、参加した学生や社会人ボランティアには、子どもを見る視点の大きな変化が見られた。

事業開始前には、

- ・発達特性のある子どもへの関わりに不安がある
- ・具体的にどのように支援すればよいのか分からない

といった声が多く聞かれていた。

しかし、実際に学校現場に入り、子どもと向き合う経験を重ねる中で、

- ・「困った子」ではなく「困っている子」という視点を持つようになった
- ・行動の背景にある気持ちや環境に目を向けるようになった
- ・まず関係づくりを大切にすることが芽生えた

という変化が見られた。

また、「困りごとが起きていない時間にどう関わればよいか分からない」という戸惑いも共有された。

しかしその迷いこそが、子どもを理解しようとする真剣な姿勢の表れであり、大きな学びの一つであった。一人ひとりの子どもを丁寧に見ようとする姿勢が育ったことは、本事業の重要な成果である。

### 1. 将来の進路や専門性への意識の深化

内田先生や山田先生の研修を受け、参加者からは将来の進路や専門性に関わる前向きな声が多く寄せられた。

- ・「将来、不登校や発達障害、学習で困難を抱える子どもを支えられる教師になりたい。そのための資格も取得したいと思った。」
- ・「教員になった時に活かせる具体的な支援方法をもっと学びたいと感じた。」
- ・「将来、学級をつくる立場になる上で大切な視点を学べた。」
- ・「“できるようになる”という言葉が強く心に残った。」

特に印象的だったのは、「子どもを変える」のではなく、「子どもができるようになる環境をつくる」という視点である。

理論だけでなく、実際の事例を通して学んだことで、参加者は将来の教師像をより具体的に描けるようになった。

本事業は、単なる体験活動ではなく、将来の専門性を考えるきっかけとなる実践的な学びの場となった。

### 2. 支援観・教育観の変化

研修後、参加者の多くが支援に対する考え方の変化を挙げている。

- ・「これまでは“子どもが自分でできるようになること”が大事だと思っていたが、大人が成功体験を意図的に設計することの重要性に気づいた。」

・「原因を十分に理解せずに関わることで、失敗体験を増やしてしまうことがあると実感した。」

・「その子に合わない支援を続けることは、努力ではなく負担になることもあると分かった。」

・「言動一つ一つには理由があると考え、まず見立ててから関わるのが大切だと学んだ。」

「努力不足」や「やる気の問題」として片付けるのではなく、子どもの背景を理解しようとする姿勢が育まれた。

子どもの課題を見るのではなく、「大人側の関わりを問い直す」という視点が参加者の中に芽生えたことは、大きな意識の変化である。

### 3. アセスメントの重要性の理解

特に多くの参加者が挙げたのが、「アセスメントの重要性」である。

・「まずアセスメントを行い、その上で支援を考えることが大切だと分かった。」

・「困りごとを正しく理解しなければ、適切な支援はできないと実感した。」

・「どこで困っているのかを見極める視点が必要だと分かった。」

・「子どもの特徴に合わせた指導が必要だと理解できた。」

山田先生は実際の児童事例をもとに、

・ 困り感をどのように見立てるか

・ 支援のポイントをどこに置くか

・ どの順番で支援を組み立てるか

を具体的に示された。

そのため参加者は、抽象的な理論としてではなく、「支援を設計する思考プロセス」として理解することができた。

### 4. 具体的実践から得た学び

参加者は、具体的な事例から多くを学んだ。

・「学習支援によって進学につながった事例が印象に残った。」

・「途中で褒めてやる気を高め、できたらしっかり褒める関わりが参考になった。」

・「漢字の意味を具体例で説明することで理解が深まるという話が印象的だった。」

具体的な支援の姿が示されたことで、参加者は「自分ならどう関わるか」を具体的にイメージできるようになった。

「失敗体験を増やさない支援」「できるかもしれないという気持ちを育てる支援」という視点が、多くの参加者の中に残った。

### まとめ

山田先生の研修と内田先生の OJT 型の現場体験を通して、

・ 子どもを見る視点の変化

- ・ 支援の責任を大人側が引き受ける意識の芽生え
- ・ アセスメントに基づく支援設計への理解
- ・ 将来の進路や専門性への意識の深化

が明確に見られた。

本事業は、単なる活動参加ではなく、

参加者にとって「教育観を見つめ直し、再構築する機会」となったと言える。

## ②どのように学び合いを取り入れたか

本事業では、講義を受けて終わるのではなく、

- ・ 現場で実践する
- ・ 振り返る
- ・ 専門家の助言を受ける
- ・ 再び考え直す

という流れを大切にした。

活動後にはLINE グループで感想や困りごとを共有し、1月の振り返り会では、

- ・ 関係づくりの難しさ
- ・ 活動回数の少なさ
- ・ 大学の授業との両立の課題

などを率直に話し合った。

その声を受けて、学校外で子どもと出会う取り組みを始めるなど、実践を少しずつ修正していった。

対話を通して学びを深め、次につなげるプロセスそのものが、ESDの学び合いの実践であったと考える。

## ③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

理論だけで終わらないように、本事業では「学んだことを、実際の子どもへの支援につなげる」ことを意識して取り組んだ。

具体的には、次のような工夫を行った。

- ・ 山田先生による実際の児童事例をもとにした専門研修
- ・ 研修前の学校訪問による児童観察とアセスメント
- ・ 現場で活用できる具体的教材の紹介
- ・ 研修後の支援案再検討（3月2日実施）

山田先生の研修では、事前に津島小学校を訪問していただき、カラフル教室在籍児童の様子を実際に見ていただいた。その上で、研修内では理論だけでなく、実際の学校での子ども姿と結び付けながら事例説明をしていただいた。

そのため、参加者は抽象的な話としてではなく、「今関わっているあの子の場合はどうだろうか」と具体的に考えながら学ぶことができた。

また、内田先生には実際の現場に共に入っていたいただき、児童への関わりを実演していただ

いた。例えば、

- ・声かけのタイミング
- ・子どもの気持ちを尊重しながら見通しを共有する方法
- ・教室に入ることへの不安に寄り添う対話

などを、現場で一緒に体験しながら学ぶ機会となった。

参加者は、

「どう声をかければよいか分からない」という不安を抱えていたが、専門家の関わりを間近で見ることで、理論が具体的な行動として理解できるようになった。

さらに、研修後には再度集まり、「自分たちならどう支援するか」を話し合う時間を設けた。

研修で学ぶ → 現場で見る → 実際にやってみる → 振り返る → 再設計する

という循環を重ねることで、知識がそのまま実践につながるよう工夫した。

理論と現場を行き来しながら学ぶこのプロセスこそが、本事業における学びと実践を結び付ける大きな柱であった。

**3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）**

本事業の目的は、

- ① 支援が必要な子どもへの関わりをより丁寧にすること
- ② 次世代の支援者を育てること
- ③ 専門家と連携した実践モデルを構築すること

であった。

#### **（1）子どもへの関わりの方の向上**

学校支援ボランティア活動を通して、支援の在り方は

「困りごとへの対応」中心から、

「日常的な関係づくりを土台とした支援」へと変化した。

参加者からは、

「最初は距離があったが、関係づくりの大切さを実感した」

「困りごとが起きていない場面では何をしてもよいか分からなかった」

といった声があり、支援は問題対応のみで成立するのではなく、信頼関係の構築を前提とする営みであることが共有された。

また、当初は「“あなたは誰？”という空気があり、関係づくりに時間が必要だった」との振り返りもあり、関係形成の難しさと重要性を実体験として学ぶ機会となった。

これらの経験を通して、子ども理解の深化と、日常的関わりの方の向上が確認された。

#### **（2）次世代支援者の育成（現場接続型教員養成の成果）**

参加学生からは、

「教育実習では教員を観察することが中心だったが、今回は子ども一人ひとりや他の子

供との関わりなどを丁寧に見る時間が多かった」  
との声が寄せられた。  
これは、従来の実習型学習とは異なり、子ども個々の状態や背景に向き合う“当事者的関与”が生まれたことを示している。  
また、社会人ボランティアからは  
「多様な児童がいる学校現場の実情を実際に見ることができた」  
との意見があり、学校現場の複雑性や多様性を実感的に理解する機会となった。  
参加者の多くが、  
・子どもの見方が変わった  
・具体的な支援方法を学べた  
・他の現場でも活かしている  
と振り返っており、中には塾講師等の職務に活かしているという声もあった。  
本活動は、  
・子ども理解の深化  
・関係構築力の涵養  
・現場の多様性への実感的理解  
・支援の前提条件を学ぶ体験的学習  
を促す機会となり、「教員になる前に現場と接続する」養成モデルの具体的実践例となった。

### (3) 専門家と連携した実践モデルの形成

本事業は規模としては小さいが、  
・専門家の伴走による助言  
・活動後の振り返りの共有  
・現場の声を踏まえた柔軟な修正  
を重ねることで、「実践を通して学び、育つ支援モデル」の枠組みが形成されつつある。  
支援と育成を同時に進める本モデルは、支援の質向上と人材育成を両立する持続可能な仕組みとして、今後の発展可能性を有している。

## 4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）

### (1) 学校との連携について — 現状と課題

本事業を進める中で、学校との連携の重要性を改めて強く感じた。  
担任の先生にカラエボの趣旨を説明した際には、  
・学校の人材不足の現状  
・少人数体制で多くの業務を抱えながら尽力されていること  
・ボランティアにできることがあれば積極的に担ってほしいという期待  
を共有いただいた。  
一方で現実には、日々の業務に追われる中で、

- ・具体的に何を依頼できるか整理する時間
- ・教材づくりや役割分担を共に検討する時間

を確保することが難しい状況がある。

本来であれば、

学校・ボランティア・専門家が一堂に会し、子どもを中心に共通理解を持ち、それぞれの役割を明確にして支援を進めることが理想である。しかし、そのための時間を確保すること自体が課題であることも実感した。

#### (2) 連携が機能した経験から見えた可能性

そのような状況の中でも、1回、担任の先生・ボランティア・専門家が具体的に役割を話し合う機会を持つことができた。

その際には、

- ・どの場面で誰が支援するか
- ・ボランティアが担う範囲
- ・情報共有の方法

を整理することができ、支援の見通しが明確になった。

役割が可視化されることで動きやすくなり、PDCAサイクルが回り始めた実感があった。

この経験から、短時間であっても共通認識を持つ場の効果は大きいことが分かった。



#### (3) 構造的課題と今後の工夫

現在の課題は、「連携の必要性は共有できているが、時間確保が難しい」という構造的な問題である。

今後は、

- ・短時間で共有できる簡易記録様式の活用
- ・オンラインでの情報共有の工夫
- ・年間計画に位置付ける仕組みづくり

などを検討し、無理のない形で連携を継続できる体制を整えていく必要がある。

#### (4) 活動面での課題

振り返りの中で、次の点も明らかになった。

- ・活動回数が少なく、関係づくりに十分な時間が取れなかったこと
- ・大学授業と学校受け入れ時間が重なり、参加が難しいこと

- ・ゼミ出席扱いや単位化など制度的仕組みがないこと

関係構築の重要性を実感したからこそ、継続的に関わられる仕組みづくりが必要である。

#### (5) 今後の展望

今後は、

- ・活動機会の拡充
- ・学校外での関係構築の継続
- ・大学との制度的連携の検討（単位化等）
- ・専門家伴走体制の継続

を通して、より参加しやすく、持続可能な形を目指す。

また、本事業の継続にあたっては、安定的な財源確保が不可欠である。

助成金の活用に加え、

- ・地域団体との連携
- ・大学との協働事業化
- ・新たな助成制度への申請

などを通じ、事業の持続可能性を高めていきたい。

#### (6) 岡山地域への広がり

本事業は、子どもを支えることと、支える人を育てることを同時に進める取り組みである。

学校の負担を増やすのではなく、地域・大学・専門家がゆるやかにつながり、支援の輪を広げていくことを目指している。小さな実践の積み重ねではあるが、岡山地域における「多様な学びを支える人づくり」の土台を築く一歩となることを願い、今後も改善を重ねながら継続していきたい。

2025年度 岡山ESDプロジェクト参加事業

「学びの多様性 × 教育者育成」実践モデル構築事業 ～校内フリースクールを活用した 現場接続型 人材育成プログラム～

# 学校支援ボランティア募集

すべての子どもに、学びの保障を。

未来の教育を共に考え、支える、  
実践型ボランティア募集！

学校支援  
ボランティアだけど、  
少し違います。

「教室には入れない。でも、学びたい。」

そんな子どもたちと向き合う『カラフル教室』でのボランティア活動！

支援の現場は、“ふつうの教室”ではありません。

『カラフル教室』は、岡山市立津島小学校の中にある、学びと安心の居場所です。

教室に入れない。クラスに居場所が見つかりにくい。

それでも「本当は勉強がしたい、学びたい」。そんな子どもたちがここに集まっています。

ここでのボランティアは、ただのお手伝いではありません。

2025年岡山市ESDプロジェクト参加事業として、特別支援教育の専門家のアドバイスを  
受けながら、子ども一人ひとりに合った学び方や安心できる空間を一緒につくります。

不登校、発達障害、学習の困難。将来、教壇に立つあなたが、きっと出会う子どもたち。

これからの教育現場で求められるのは、

「特性を見極めた支援」と「安心できる学びの場」です。

でも、それは教科書では学べません。

現場で、子どもと向き合い、共に過ごし、実践を通して身につけるもの。

ここでの経験は、きっと、あなた自身の成長につながります。

ご興味のある方は、下記のQRコードからお申し込みください。

## 実施期間

2025年9月～2026年2月

## 活動場所

岡山市立津島小学校  
カラフル教室

## 応募対象

- 岡山市教育委員会 生涯学習課のボランティア登録可能な方
  - 週1回もしくは月2回以上の参加が可能な方
- ※活動前に専門家によるオンライン研修あり  
※学業や予定と柔軟に調整可能

未来の教壇に立つあなたへ――

今、ここでしかできない学びと出会いが待っています。



参加申込

<https://forms.office.com/r/rQwRVcdgCS>

(様式第8号)

参加者募集チラシ (裏)

## 『カラフル教室』 × 未来の教育者たち

 このボランティアのポイントは、  
“授業補助”や“掃除・配布物のお手伝い”でもない、子どもと共に「学びをつくる」現場であること。

### 活動の内容

- ・岡山市立津島小学校内にある「カラフル教室」での実践支援
- ・子どもたちとの 対話・遊び・学習支援
- ・教室内での 見守り・活動サポート
- ・教職員や支援スタッフとの チーム支援
- ・iPad・クロムブックなどのICTツールを使った学習支援

一人ひとりの特性に応じた関わり方、個別最適な学びを“実践”を通して学べます！

### このボランティアの最大の特長！

特別支援教育の専門家から直接アドバイスを受けながら、実際の子どもの支援に関わることができるという点です。  
下記の先生方と一緒にアセスメントをしたり、子ども一人ひとりにあった支援を共に考えていきます。

「見学型」や「マニュアル通り」ではありません。

本当に子どもと向き合う力＝“現場力”を育てる、実践的な人材育成も兼ねています。



山田充先生(日程次第)

大阪市教育委員会 インクルーシブ教育推進室  
通級指導アドバイザー

- ・約37年の現場経験を持つ特別支援教育士スーパーバイザー
- ・LD、ADHDなど特性のある子どもへの科学的アセスメントと実践的支援に精通
- ・現場教員向けのわかりやすい研修に定評
- ・通級教室の改善やインクルーシブ教育の体制整備にも尽力
- ・日本屈指の特別支援教育に精通する先生
- ・「子どもの学ぶ力を引き出す個別の指導と教材活用」など、著書や教材多数



内田直美先生

IPU coraggio (コラッジョ) 代表  
元岡山大学附属支援学校教員

- ・保護者・学校・地域を巻き込む包括的な学習・発達支援の専門家
- ・通常学級、特別支援学級、通級指導、発達支援室での豊富な指導経験
- ・ICT研修や支援ツールの活用支援も実績多数
- ・岡山県特別支援専門家チームの一員として、活動経験あり

### こんなあなたにおすすめ！

- ・教員・特別支援・心理・福祉など、教育支援職を志す人
- ・子どもと“向き合う力”を育てたい人
- ・子どもに関わる仕事に関心がある
- ・他の学生ボランティア・社会人ボランティアとつながりたい
- ・自分の支援が、子どもと自分自身を変える体験をしたい人

学校に行きたくても行けない。

学びたい気持ちはあるのに、うまくいかない。

そんな子どもに寄り添える大人がもっと必要です。

あなたの一歩が、子どもたちの希望になります。



子どもも、大人も、学び合える場所

「誰一人取り残さない教育」に、あなたの一歩を

(様式第8号)

研修会案内チラシ (表)

— 「困った子」ではなく、「困っている子」をどう見るか。 —

教室に入りにくい子ども、学習につまずきを抱える子ども、一見「困った行動」に見えるその背景には、必ず理由があります。

本研修では、子どもの行動や学習のつまずきを「努力不足」や「性格」で片づけず、観察・分析（アセスメント）を起点に支援を考える視点を、これから教育・支援に関わる学生や若手支援者にも分かりやすく学びます。

◆研修内容(予定)◆

- ・支援が必要な子どもへの基本的な向き合い方
- ・教室に入りにくい子どもへの支援の考え方
- ・学習に苦手感のある子どもへの学習支援の視点
- ・子どもの見取り・実態把握（アセスメント）の基本
- ・校内別室（カラフル教室）の児童を事例とした事例検討
- ・具体的な支援方法のレクチャー・質疑

参加メリット

- ✓ 子どもの見方が変わる
- ✓ 「困った行動」の背景を考えられるようになる
- ✓ 根拠をもって支援を考える力が身につく
- ✓ 明日から使える支援の引き出しが増える

講師 について		<b>山田 充 先生</b>
	特別支援教育士スーパーバイザー (S.E.N.S-SV) 大阪市教育委員会 インクルーシブ教育推進室 通級指導アドバイザー	山田先生は、特別支援教育士スーパーバイザー（S.E.N.S-SV）として全国の教育現場から高い信頼を集める、特別支援教育の第一線で活躍する実践家です。堺市で通常学級担任として17年、通級指導教室で20年にわたり、学習面・行動面・情緒面にさまざまな困り感を抱える子どもたちの指導に携わってこられました。また、広島県廿日市市教育委員会では巡回相談や教員研修にも従事。現在は大阪市教育委員会において、通級指導や校内支援体制の構築、教員研修の推進に力を注がれています。現場経験に裏打ちされた的確なアセスメントと、子ども・教員双方に寄り添う具体的な助言は、「腑に落ちる」「すぐ現場で使える」と高く評価されています。

《開催概要》 ご参加希望の方は、2月9日までに事前申込をお願いします。



日時	令和8年(2026年)2月12日(木) 19:00~21:00
会場	IPU環太平洋大学グローバルキャンパス
対象	教育学部学生・教員・支援者・教育支援に関心のある方

※カラエボ事業関係者対象

問合先 | ilca.choice2024@gmail.com



開催場所は、

イオンモール岡山の近く /



主催: 岡山ESDプロジェクト参加団体 iLCA 現場接続型教員育成プログラム「カラエボ」

助成: 一般財団法人グリーンコープ生協おかやま福祉活動組合員基金



そもそも、

# カラエボって何？

## カラエボは、

公立小学校内の校内フリースクール（カラフル教室）を活用し、子どもを支えながら、未来の教育を担う人を育てる取り組みです。

### 名前の意味

カラ：カラフル → 子ども一人ひとりの個性、学び方の多様性

エ：エデュケーション（教育）→ 学びを支える力・教える力

ボ：ボランティア → 現場で子どもと関わり、実践から学ぶ

子どもも、大人も、一緒に学び合い、成長していくプロジェクトです。



## なぜ、この取り組みが必要なの？

近年、学校現場では、不登校や学級での学びに難しさを感じる子どもが増え、一人ひとりの背景や状況に応じた支援が求められています。一方で、教員志望者の減少や若手教員の離職により、学校は慢性的な人手不足になっており、限られた体制の中、模索しながら支援にあたる**先生方の負担は激増しています。**

校内フリースクールは、子どもにとって心理的安全を保障する大切な居場所ですが、十分な人的・専門的支援体制が整っておらず、関わり方次第では、子どもの自己肯定感や学習意欲を損なう恐れもあります。だからこそ、学校と連携し、**専門家の視点を取り入れながら、支援の質を高めていく**仕組みが必要です。

「カラエボ」は、**専門家の支えのもと、教員を目指す学生**や子ども支援に関心のある**地域の方々**が、将来につながる学びを目的に**ボランティア**として学校に関わる取り組みです。人手不足を補いながら、子ども一人ひとりに丁寧に寄り添う支援を目指します。またこの取り組みは、**子どもを支えと同時に、関わる大人自身が学び、育つ場**でもあります。

**学校・地域・専門家が協働し、子どもたちの育ちと学びを支える**——「カラエボ」は、そんな**新しい協働の形**として、現在少しずつ取り組みを進めています。

## どんなことをしているの？

教室に入りづらい、集団での学びが難しい子どもたちが、安心して過ごせる校内フリースクールで困り感や特性を丁寧に理解し、専門家の助言を受けながら一人ひとりに合った関わり方・学び方を考え、支援していきます。

「ただの居場所」ではなく、**意味のある学びにつなげることを大切に**しています。

## 誰がやっているの？

この取り組みは、学校・専門家・岡山ESDプロジェクト参加団体 iLCA が連携して進めています。

**運営**：地域の教育・子ども支援に取り組む市民ボランティア団体 iLCA（いるか）が、学校と協力して企画・運営しています。

**現場**：岡山市立津島小学校内の校内フリースクール「カラフル教室」を拠点に活動しています。

**専門的な支えと関わる人たち**：IPU coraggio（環太平洋大学 教育相談支援）の内田直美先生や特別支援教育士スーパーバイザーの山田充先生の専門的な助言の元、教員、教員・子ども支援を目指す学生、教育や子ども支援に関心をもつ社会人などの地域人材が、子どもと向き合っています。

## カラエボが目指していること

- 子ども一人ひとりの「学ぶ権利」を守ること
- 誰一人取り残さない学びの場を学校の中につくること
- 現場で役立つ支援力をもった人を育てること

実践を積み重ね、学校と地域の未来につながるモデルをつくっています。

